

水軍レースによる 町おこし



水軍レース
実行委員会委員
矢野 久志

● 17回目の水軍レースを迎えて

宮窪の夏に水軍レース在り！水軍レースは、ようやく町内外の多くの人々にそう思っていただけるようになりました。今年も参加54チームを迎えて17回水軍レースが盛大に開催されました。

私は初めて、水軍レースのスタートの旗を振らせてもらいましたが、スタート前には会場全体が一瞬静まりかえり、緊張した選手達の心臓の音が伝わってくる

ようでした。スタート合図のドラが鳴ると同時に旗が振られると、大きな掛声とともに水しぶきを上げながら、5隻の小早船が一斉に漕ぎだされていきます。1位でゴールしたチームは全員が万歳を何度も繰り返し、その光景はまるで童心にかえったようでした。水軍レースに参加した多くの人達が大いに楽しんでる姿を見て、立派な大会になって本当に良かったと思うと同時に、水軍レースを始めたころの苦労が思い出されました。

● 町おこしグループの活躍

水軍レースを語る上で、町おこしグループ「水軍ふるさと会」を抜きに語ることはできません。昭和62年、水軍の歴史文化を活かした町おこしをしようと、10名で「水軍ふるさと会」を結成しました。平成2年に愛媛県で国民文化祭が開催さ

れることになり、宮窪町では「押し船大会」が行われることになりました。

村上水軍が使用していた5丁櫓の小早船を復元して参加すれば、全国に水軍の町をPR出来るチャンスだと考え、町長に小早船の建造を提案しました。私達の熱意に町長も理解を示し、町で2隻建造することになり、元東大教授のアドバイスにより、小早船は戦国時代に使用されていたとされる形で復元しました。押し船大会には、宮窪漁協青年部の若者が赤フンドシ姿で登場、水軍旗を掲げた小早船を威勢よく漕ぐ勇壮な姿に、地元のお年寄りは感動の余り涙する者もいました。

翌年から2隻の小早船を使って「能島水軍レース」を開催することになりました



だが、水軍ふるさと会のメンバーは、大会運営の寄付金集めや大会参加への呼びかけなど、大会準備のため毎日深夜まで活動しました。

第1回水軍レースには、地元を中心に15チームが参加し、私達の念願であった水軍レースが無事終わった時は、ホッとすると同時に大きな満足感に包まれました。打ち上げで仲間と飲んだ酒の味は、一生忘れることはないと思います。

2年後、隣町の吉海町と伯方町が小早船を新たに建造し、全国でも珍しい3町の共同開催で実施することになり、名称も「水軍レース」と改め、漁協、商工会、婦人会等、町内の各団体が実行委員会に入り、地元テレビ局も一時間番組を制作放映するなど、一躍、町を挙げてのイベントになりました。

また、水軍ふるさと会の活動に刺激されたかのように、町内に2つの町おこしグループが新たに誕生しました。水産研究会は、毎月の「漁師市」の開催や、漁船で能島周辺の潮流を見て回る「潮流体験」を実施。石彫サークルは、廃石を活かした



モニュメントを制作して、共に話題となりました。3つの町おこしグループが活躍する宮窪は、元気な町として注目されるようになりました。

● 水軍レースを通じての交流

水軍レースを通じて、漁業の盛んな宇和島市遊子地区とは、毎年交流を続けています。また、大分県玖珠町は、来島水軍が移封され

た水軍の歴史ある町であり、平成5年、水軍を縁に両町の町おこしグループが交流会を開催しました。さらに、広島県宮島町とは、平成9年に「村上水軍 厳島合戦への道」として、小早船2隻で2日間かけて宮窪から宮島まで行くイベントを実施しました。

両町とも水軍が縁の交流を契機に、その後毎年、水軍レースに参加いただき親睦を深めました。

● 水軍博物館の建設

私達は町おこし活動を通じて、新しい水軍資料館の建設を大きな目標とするようになりました。宮窪町には水軍資料館がありました。公民館2階の狭い部屋に展示され、観光バスも近くに停めら



れず不評で、年間の入館者数も僅かでした。水軍レースの開催が重なることに、マスコミが村上水軍のこをとり上げてくれるようになり、町内でも水軍資料館建設の気運が高まってきました。

平成16年、町民の念願だった日本初の水軍博物館が建設されオープン。観光バスも来るようになり、オープン5周年で25万人の入館者を達成しました。

隣接する港から出発する潮流体験は、漁協が新しく観光船を建造し運営しており好評で、毎年乗船者が増加しています。宮窪の観光施設の核である水軍博物館の建設や人気の潮流体験実現は、水軍レースが20年近く継続出来たことが大きく寄与していると私は確信しています。

しかし市町村合併後、大会運営費の3割は寄付金で賄わなければならなくなつたため、今後水軍レースが継続できるかどうかは、地元の方達の協力次第ということになりました。町の活性化や観光客誘致に貢献、しかも地域の歴史に関わつたイベント「水軍レース」の継続を私は切に願っています。